World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第71回

今ミャンマーで起こっていること

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

『最後のフロンティア』の掛け声のもと、2011年以降に始まった日本企業によるミャンマー詣で、そして、政府による多額の支援。一時は順調に発展するかに見られたが、スーチー政権になりその動きは格段に鈍くなり、ミャンマーチャットの下落や物価の上昇など庶民の生活は苦しくなってきているようである。10月から観光目的の日本人へのビザを免除したミャンマーの最新事情をご紹介したい。

経済の低迷

ミャンマー人の朝ご飯、モヒンガー。私もこの魚スープ麺は大好物だが、以前は屋台で300チャットぐらいだったが、今は500チャット出さないと食べられない。『この国には少額コインがないから、値上げは一気に100単位』と言われたことがあるが、確かに値上げ幅は急激だ。

最近では、『ミャンマーチャットは１ドル1600を越えた』といわれ、この国の置かれた状況を見た思いがした。確か３年前は1250、その１年前は1000チャットだったことを考えれば、着実に為替は下落している。以前はミャンマーの発展、特にヤンゴンの不動産バブルに海外マネーが大量に流入していたが、２～３年前からその資金は引き上げられ、代わりとなる投資対象もないことが、チャット安の主要因とも言われている。

ヤンゴンの経営者に聞くと、『今の政権になってからは経済が回っていない。前の政権の賄賂政治をよいという者はいないが、だからといって、何でもかんでもルールで縛り、かつ、誰も積極的に行動しない今の政権がよいという者も少ない』と吐き捨てるようにいう。何故動かないのかを問うと、『スーチーさんが全ての権力を握っている限り、決定があまりにも遅く、かつ誰も彼女の代わりができない（いや、敢えてしない）ので、いつになっても何の政策も出てこない』というのだ。

写真１　ヤンゴン中心部
安くなったホテル

物流の停滞

タイとの国境、ミャワディに行ってみると、『モノの動きがどんどん緩慢になってきている』と物流業者が嘆く。初めは政府の厳しいルールに従い、書類などが厳格で動きが鈍かったが、最近はチャット安の影響が大きく、輸入できる量自体が減少を続けていると輸入業者は語る。

さらに、今年８月に起こった洪水により、タイの物品は数週間にわたり、ヤンゴンへ輸送することができず、大きな損失が出たという。ミャワディは、タイからの物資がヤンゴンへ入る最大のルートであり、ヤンゴンの物価上昇の一端は、この影響によるのかもしれない。『これに対しても政府は無策だった』と業者は嘆く。

しかし、ミャワディ－ヤンゴンルートは、主要道路にもかかわらず、その整備自体が遅れている。数年前は、一本の道路を片道通行でトラックが通って

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

おり、事故も多発していたようだ。今回、ヤンゴン－モウラミュイン－ミャワディというルートを走ってみたが、ヤンゴン－モウラミュインは問題なく舗装されていたものの、モウラミュイン－ミャワディは時速30㎞も出せない区間が全体の３分の２を占めており、以前よりよくなったとはいえ、道路整備の遅れが物流の停滞を招いている面もある。

地方都市の現状

ヤンゴンに関しては街の発展が感じられ、少し目を離すと新しいショッピングモールができて、以前は不足していたホテルもどんどん建てられており、５年前には80－100ドルだったホテルも今回は30ドルちょっとで泊まれた。Wi-Fi 拡充などサービスも向上しており、その変化には大いに驚いた。

では地方はどうなのか。ヤンゴンからバスで６時間、ミャンマー第３の都市、モウラミュインへ行ってみた。ヤンゴンからは VIP バスと呼ばれる中国製バスが走り、ゆったりとした座席、飲み物やスマホ充電など、そのサービスはタイの長距離バス並に良く、道路も舗装されており、この辺りの進化にも驚く。

モウラミュインの街で川沿いを歩いてみると、非常にゆったりとした時間が流れる懐かしい気分になる。仏教寺院、キリスト教の教会、イスラムモスクなどが建ち並び、200年弱前にイギリスが植民地支配を始めた後の繁栄ぶりの一端を垣間見ることができる。だが、残念ながら現代の経済発展とは無縁としか思われないほど、街は落ち着き払っており、ようやく少し良いホテルを建てようかという感じだった。ちょっと前は、ヤンゴンのホテルがバブルのように高騰していたが、今では地方都市の方が設備やサービスが伴っていないのに料金だけが高いという現象が見え始めている。

今後のミャンマー

2020年には次回の大統領選挙が予定されているが、このままではスーチー政権は危ういと思わせるに十分だった。それでも、現地在住期間の長い日本人は、『良い人材がいればすぐにでもトップを替えたいが、適当な人はいない』と嘆く。

また、ヤンゴンに長く住む華人ともコンタクトしてみたが、『どんな政府であろうと我々には関係ない。自分の身は自分で守る』ときっぱり言われて、こちらも驚いた。1962年に始まった社会主義革命による国有化、そして、その失敗が華人に大きく影響を及ぼしていることが、言葉の端々からうかがえた。

ロヒンギャ問題などで、EU をはじめ国際社会から、経済制裁の可能性があるミャンマーは、その活路を中国に求めることもできず、ある意味で日本の方を向いてきているのかもしれない。10月より観光目的のビザを免除（韓国人も同様）し、観光収入の増加を図ろうという目論見をスタートさせたが、（一人の旅人としては大歓迎だが）どれほどの経済効果が期待できるのだろうか。地元では『もし、EU が制裁を科さなければ、このビザ免除は１年で終わる』と見る向きもあるが、果たしてどうなるだろうか。いずれにしても、カギはスーチーさん、ということか。

写真２　モウラミュイン
古い教会